

全体論と相関の論理構造

— ヘーゲル論理学に於ける「本質的相関」を手掛かりに —

徳増 多加志 (児童学科・教授)

Holismus und die logische Struktur des Verhältnisses An Hand von dem wesentlichen Verhältnis in Hegels Wissenschaft der Logik

TOKUMASU Takashi

Zusammenfassung

Der Zweck dieser Abhandlung besteht darin, eine mögliche logische Struktur des Holismus durchs Analysieren “des wesentlichen Verhältnisses” in Hegels Wissenschaft der Logik zu enthüllen. 1. Wir legen eine der Schwierigkeiten vor, die der Holismus überhaupt bergt. 2. Wir analysieren den Begriff des wesentlichen Verhältnisses und dann verfolgen “das Verhältnis des Ganzen und der Teile”, “das Verhältnis der Kraft und ihrer Äußerung” und “das Verhältnis des Äußeren und Inneren.” 3. Wir zeigen eine mögliche Struktur des Holismus und betrachten seine Bedeutung.

Schlüsselwörter : Hegel, Logik, Holismus, Verhältnis

本稿は、ヘーゲルの「本質的相関」の議論と「全体論」一般の問題との接触を試みるものである。本稿の手順を記しておく。先ず、ヘーゲルの全体論と全体論一般の基本的な難点を指摘し、次に、ヘーゲルの「本質的相関」の分析を施し、最後に、2で顕在化させたヘーゲル独特の全体論の論理構造のもつ哲学的意義を検討する。

1. ヘーゲル哲学と全体論の難点

1-1 全体論とヘーゲル哲学

ヘーゲル哲学が全体論的であることは改めて言うまでもない。例えばそれは、『精神現象学』「序論」での「私の見解は、ただ体系そのものの叙述によってのみ正当化されざるを得ない」(Bd.3,

S.19) という文言に典型的に現れている。それに異論はない。しかし、その解釈となると、近年に限っても、「意味の全体論」と結びつける解釈もあるし、認識論の問題として基礎づけ主義に対するアンティ・テーゼとして扱ったり、様々である²⁾。また、上の引用箇所についても、『論理学』時点でのヘーゲルの考えとは違うという解釈もある³⁾。さらに「国家論」に於いては、その全体論は忌避される一方にすら見える。

このような状況にあって、本稿が辿る道は一見地味である。しかし、私の解釈では、ヘーゲルは、かなりの程度まで「全体論」の孕む難点を知っており、『論理学』ではこれを本格的に扱い、「全体論」の可能な構造を提示しているのである。

1-2 全体論の難点

言語哲学者たちが「意味論」の問題として「全体論」を扱うとき、その難点は「全体論」一般に通じるところがある。趨勢としては、「全体論」擁護が主流のようであるが、有力な批判もある。とりわけ、マイケル・ダメットの批判は見逃すことができない。ここでは特に言語学習のプロセスを手掛かりにして、全体論批判を試みている議論を見ておこう。

「意味の全体論」とは、個々の文や語の意味はそれを含む言語全体のなかで決定されている、というものである。(これに対して、「意味の原子論」は、文や語は、それぞれ単独で意味が決まっている、とする考えである。)

このような言語観が正しいとすると、徐々に言語を習得していくということが理解できなくなる、というのがダメットの批判の基本である。徐々に習得するということは、言語全体の一部分を習得することであるのに、言語全体を知ることにはその構成要素である部分の意味を知ることではできないはずだからだ。そこでダメットは、学び始めた人が理解する個々の文や語がすでに習得している人の理解するものと同じでなければ、徐々に習得することは不可能だと考える。原子論を採るわけにもいかないので、ダメットとしては、原子論ならざる「分子論」を提案している由である⁴。

しかし、分子単位で意味を決定できると言うためには、幾つかの文や語の集合を「分子」と見なしてもいいことを正当化しなくてはならないし、また、それが認められたとしても、原子を飛び越えて一挙に分子を理解できるというのは、全体論より穏やかではあるが、やはり難点があると思われる。概念や意味を考える場合、どうしても「言語の全体が個々の言語表現の意味を規定する」という「全体論」の影に脅かされることになりそうだ。

2. 「本質的相関」の概念分析

「全体と諸部分の相関」、「力とその発現の相関」、「内的なものと外的なものの相関」の分析に先立って、先ず「本質的相関」の意味を確認することか

ら始めよう。

2-1 「本質的相関」の概念

「本質的相関」は、『論理学』「本質論」の中間を占める「第二篇 現象」の最終章に相当する。この篇では先ず世界を一重のものとして直接に受け取る「現実存在」が扱われ、次に、世界を二重化し、「現象世界」と「それ自体で存在する世界」として並置させる「現象」という概念枠が分析され、これを「本質的相関」が承ける。「本質的相関」は「現象」という概念枠で「世界」を解釈することが真相に於いては何を意味するのかを顕在化する課題を担っている。

2-1-1 「本質的相関」の二側面（二つの関係項）

ヘーゲルが「本質的相関の概念」(S.165)と呼ぶ節を見てみよう。

「本質的相関の〔一方の〕側面は一つの統体であるが、それは本質的なものとして、対立措定されたもの、自分の彼岸をもっている。この彼岸は現象でしかないが、その現実存在はむしろ自分自身の現実存在ではなくて、自分の他者の現実存在である。したがって、彼岸〔現象〕は、自分自身の内で壊されたもの *ein in sich selbst Gebrochenes* である。だが、この揚棄された存在は、それが自分自身と自分の他者との統一であること、それゆえ、全体である、ということで成り立つ。まさにそうであるがゆえに、この揚棄された存在は自立的な現実存在をもちながらも、本質的な自己内反省なのである。」(S.165)

「本質的相関」の概念を説明するに際して、相関を形づくる二つの側面（相関項）の意味の分析から始められる。先ず、「それ自体に於いて存在する世界」を継承する「本質的な側面」が見られる。この側面は、「世界」として一つの完結したもの〔統体〕ではあるが、その彼岸にある「現象世界」を不可避的にもつ。「現象世界」は、何か現象した世界として存在するのであって、自分自身が現象しているわけではない。「それ自体に

於いて存在する世界」が現れる限りに於いて「現象世界」は意味をなすのである。同様にして、「それ自体で存在する世界」も「現象世界」がなければ、「それ自体で存在する」という規定は空虚になる。それゆえ、いずれの世界も、それだけで独立させると自滅する。この自滅を余儀なくされるものをヘーゲルは「自分自身の内て壊されたもの」、「揚棄されたもの」と呼ぶ。

2-1-2 「相関」に於ける「揚棄されたもの〔モメント〕」

議論への準備も兼ねて、「揚棄されたもの」のヘーゲル特有の意味を確認しておく。「揚棄」には「保存」と「廃棄」の二義があることは有名であるが⁶、ここでは別の視角から説明しておこう。「揚棄されたもの」は「モメント」と同義である。それは、或る規定が「自分と自分に固有の他者との関係」に於いて新たに規定され直されていることを表す。

難しいのは、ヘーゲルがモメントと「このモメントとそれの他者をモメントとする関係の全体」とをイコールで結ぶことである。——例えば、「右」と「左」が相関に於いて捉えられると、次の三つの言い方が可能になる。1)「右」は「右」である、2)「右」は「右と左の関係」である、3)「右」は「左」である。——この説明は不可解に思えるかもしれない。しかし、「右」という言葉の意味を理解するためには、次の三つを、隠然とであれ、理解していなくてはならないことを考え合わせるとき、理解への糸口が見えてくるように思われる。すなわち、i)「右」は「右と左との関係」に於いてしか意味をもたない、ii) その「関係」は「右」と「左」を関係項としてもたない限り意味をなさない、iii)「右と左を含んだ関係」なしには「右」も「左」も空虚である。

2-1-3 直接性に於ける「自立的現実存在」

引用の解釈に戻ろう。「揚棄されたもの」は「自分自身と自分の他者との統一」であることに於いてしか意味を持たない。つまり、「現象する世界」は、「現象する世界」と「それ自体で存在

する世界」との統一であることに於いてのみ成り立つのである。ここまでは、関係項の意味を関係そのものに還元・解消する存在観、関係の根源性を唱える存在観を指しているように見える。しかし、ヘーゲルは「揚棄されたものは、自立的な現実存在をもちながらも、本質的な自己内反省である」と付け加える。この文の前半は関係への還元・解消どころではなく、「自立的な現実存在」を認めている。——この一見撞着したような規定は何を意味するのか。この説明は、この文の後半に出てくる「自己内反省」に係わる。先取りして言えば、「自己内反省」は「他者への反省」と不可分な構造をもっており、「反省の論理」が顕現してくるような仕方で説明される。

「本質的相関の概念」を提示した後で、ヘーゲルはこの考察の出発点を「本質的相関の含む同一性が完全でない」(S.165)ことに定める。その意味は、差し当たり、相関項〔本質的相関の二側面〕の本来の姿である同一性（これを「統体」とも呼ぶ）が隠伏化しており、相関項が自立性をもっている。二つの相関項は、本来はモメントであるはずであるが、そのモメント的性格が隠伏化しているがゆえに、この出発点に於いては、二つの自立的存在者が直接的に対峙する、というようにして登場する。この出発点から「本質的相関の孕む同一性」顕在化させることが課題となる。

ところで、「本質的相関」は「A. 全体と部分の相関」、「B. 力とその発現の相関」、「C. 内的なものとの外的なものとの相関」の三つに区分されるが、これは相関の様々な種類を順に論じていくということではない。世界を対立する二側面のそれぞれから見るときに、そこに生じてくる我々の認識の混乱が跡づけられていくのである。その混乱の根を見極めるために、それらの側面の意味の分析がなされる。「全体と部分の相関」はAで終結しているわけではない。BCはAの相関では隠伏している論理を顕在化していく過程である⁸。

2-2 「相関」の直接的在り方の分析——全体と諸部分の相関

ここでは「全体と部分の相関」を扱うが、それ

は「相関」の概念に課せられた問題を析出することを目的とする。それは続く二つの相関の必然性を明らかにすることに繋がる。

2-2-1 「全体と部分の相関」の直接性の分析

「全体」と「部分」はそれぞれ、前者が「それ自体で存在する世界」から、後者が「現象する世界」から出来たものである。ヘーゲルは、「全体」を「否定的統一」、「部分」を「肯定的自立性」と規定することによって、一つの世界に対する二つの見方を提示する。一つは「全体論」で、直接に現れる多様を否定することで一なる全体を世界の本質と見ることで成立するから、「否定的統一」と表現される。もう一つは「部分論」（熟さない表現であるがこう呼んでおく）で、直接に現れる多様をそのまま承認することで成立するから、「肯定的自立性」と呼ばれる。

「全体と部分の相関」の分析に入ろう。ヘーゲルは、二側面が「もまた *das Auch*」（副詞 *auch* を名詞化した表現）によって結びついていると説明する。これは、「全体」と「部分」とがまだ繋がりの見えない分離した観点として並置されていることを指している。これに基づいて「全体論」と「部分論」の二つが無媒介に並置される。並置されるのであるから、それぞれの見方が自立化するように思われる。そのような事態が生じるのは、そもそも「全体」と「部分」を無媒介に取り上げることにある。しかし、「もまた」によってであれ、曲がりなりにも結びついている以上、「全体」と「部分」のそれぞれは、揚棄されたもの（モメント）でもあらざるを得ない。したがって、「この相関は一つの関係の中に二つの側面の自立性を含んでいるが、同様にまたそれらの側面の揚棄された存在を含んでもいる」（S.167）のである。ヘーゲルは、ここに「矛盾」を見る。

2-2-2 「全体と部分の相関」の孕む矛盾の不可避性

「全体は反省した統一である」（S.167）という文を見てみよう。「反省した」ということの意味にポイントがある。「反省」とは「どこかへと出て

行ってそのどこかから帰ってくる運動」の全体を表す。ここでは、多様な現象（諸部分）を否定してそこから単純なものへと還帰した結果として、「統一」が捉えられているのである。特に注意したいのは、還帰の運動（ヘーゲルは「自己内反省」と呼ぶ）は外へ出ていく運動（ヘーゲルは「他者への反省」と呼ぶ）なしには意味をなさないということである。元の場所とは違う場所へと出て行くことなしには、戻ってくるのが意味をなさないからである。それゆえ、「反省した統一」は、外部に出てその外部を否定することによって成立する「否定的な統一態」である。こうして、「否定的統一としての全体」は「自分の存立機能を対立措定されたもの、多様な直接性、諸部分に於いてもつ」（ebd.）ことになる。すなわち、「全体は諸部分なしには何もものかであることはない」（ebd.）のである。——「部分」に関しても同じ事情が成立する。「諸部分」が「全体である関係」の内に置かれなければ、それは「多様な現実存在」でしかなく、「部分」とは言えない。すなわち、「部分」であることは、「部分が全体に於いて自立性をもっている」（ebd.）ことを含意するからだ。——以上から、「全体と諸部分は相互に条件づけ合う」（S.168）ということが明らかになった。

「根拠」の箇所が登場した「条件づけられたものと条件の関係」は「線形の無限連鎖」⁹に陥ったが、ここでは両側面は相互的に条件づけられるがゆえに、この連鎖は克服される。ヘーゲルはこれを「条件づけるはたらきの自分自身への還帰」（ebd.）と呼び、「無条件的なもの」を見る。「無条件である」とは、「条件と条件づけられるものの関係の中において他者として制約されていること」から解放されていることだ。それは、「条件」と「条件づけられたもの」に対する第三者でなくてはならない。両項を「条件」と「条件づけられたもの」の「関係」として形づくるはたらきがそれだ、とヘーゲルは考える。「全体」と「部分」の二側面は、この意味での「無条件的なもの」に於いて捉えられる。「無条件なもの」に於いて、「全体」と「部分」の二側面は、「相互依存性（モメントであること）」と「没交渉的自立性」という

二つの在り方を採る。(以上S.168)

「相互依存性」から明るみに出されるのは、「全体」と「部分」の相等性である。「諸部分は全体に等しい。諸部分のなかに存在しないものは全体のなかには何もない、また、全体のなかに存在しないものは諸部分のなかには何もない」(S.169)ということである。これは、謂わば、指示対象 Bedeutung としての「全体」と「部分」の同一性のことを指していると解することもできる¹⁰。

これに対して「両側面の没交渉的自立性」は、「全体」と「部分」の相異性を示す。これは、「全体は全体である」と「部分は部分である」というトートロジーを導くことで示される。指示対象の同一性に対して、意味 Sinn の相異を示していると見てもいい。——「全体は諸部分に等しい」とは言っても、「諸部分としての諸部分に等しいのではない」。「全体」に等しいのは、「自立的な相異なるものとしての諸部分が一緒にされたもの」でしかない。ところで、「諸部分が一緒にされたもの」とは「諸部分の統一、すなわち、全体そのもの」に他ならない。したがって、「全体は全体に等しい」ということになる。同様に、「部分は全体に等しい」といっても、「統一としての全体」には等しいわけではない。精々のところ、「全体の多様な諸規定の一つが部分に帰せられる」ということではない。つまり、「諸部分は分割された全体、すなわち、諸部分としての全体に等しい」ということではない。こうして、「諸部分は諸部分に等しい」が導かれる。(以上 S.169)

トートロジーへの帰着は、「全体」と「部分」がそれぞれ「没交渉に離ればなれになる」ことを意味する。ヘーゲルはこれを「自己関係」と捉える、すなわち、他者から切り離されて自分にだけ係わることとして捉える。しかし、これによって両側面は自滅するのである。——「部分」から切り離された「全体」は、「抽象的にして自分のなかで区別されていない」ものであるから、「全体」とは呼べない。なぜなら、何か或るものが「全体」と呼ばれるのは、その中に区別された部分があってそれらの纏まりが認められる場合に限られるからである。「全体」であるためには「部分」をも

たなくてはならないのである。同様に「部分」に関しても、「全体」から切り離された「部分」は、「互いに没交渉な多様なもの」にすぎないのであって、「部分」ではあり得ないのである。それゆえ、「全体」も「部分」も「自分の他者への反省を自分の真理としてもつ」という構造をもつ。ヘーゲルは、この運動を、「自己内反省の運動」が、「他者への反省運動」を介して自分を取り戻す運動として捉えるのである。(以上 S.169f.)

こうして、「全体」を現実存在するものとし「部分」をモメントとする見方(全体論)もその逆(部分論)も成り立たないことが分かる。なぜなら、自立的存在とされるものは、「全体」であれ「部分」であれ、「それ自身が最初のものではなく、他者に於いてその始まりをもつようなものにすぎない」(S.169) ことが顕在化したからである。

2-2-3 媒介の論理の顕在化

ヘーゲルは、「相関の真理は媒介の内にある」という。このことの意味を精確に取り出すことは、存外難しい。次の引用を詳しく見てみよう。

「…相関の本質は否定的な統一であって、この否定的統一に於いては、反省した直接態も存在する直接態も揚棄されている。相関は、その根拠へと還帰していく矛盾である。…しかし、この反省した統一が同じようにまた揚棄された統一としても措定されていることによって、この統一は自分自身に否定的に関係し、自分を揚棄し、自分を存在する直接態にする。」(S.170)

ここでは、相関項である「全体」と「部分」がそれぞれ、「反省した直接態」、「存在する直接態」と呼ばれている。これらが「否定的統一」の中では「揚棄されている」というのである。「全体」と「部分」をモメントとする「否定的統一」とは「相関」のことに他ならない。ところが、この「相関」をヘーゲルは「矛盾」として捉える。どういうことだろうか。——「否定的統一」も自己内還帰(自己関係)することで、二つの相関項から切り離される。それも、モメントである「全体」

と「部分」にとっての（謂わばメタ・レヴェルにあるにせよ、ともかく）「全体」である。ところで、「自己内還帰の運動」は「他者への反省の運動」を不可分なものとして前提している。それゆえ、モメント（全体と部分）と「否定的統一」（相関）のあいだにも、相関項どうしが具えていた構造が見られることになる。すなわち、没交渉的自立性とモメント的性格との不可避的な結合、すなわち、矛盾が見られる。この先に、「初めの全体と部分」と「相関」をモメントとする一つ上のレヴェルに「相関」を設定したとしても、同じ末路を辿ることは見易い。——このような、不可避的に纏わりつく矛盾を解消するのが「媒介の論理」である。

「媒介」とは、二つの相関項（二側面）を結びつけるものを指すのである以上、上の議論で登場した「否定的統一」と全く別のものではない。しかし、その捉え方に微妙な違いがある。「全体」と「部分」が孕むのと同じ構造の繰り返しを回避するような仕方では、「媒介」は捉えられなくてはならない。それゆえ、ヘーゲルは、「相関はもはや全体と諸部分の相関ではない」（S.170）と言い切るのである。——ヘーゲルは、「それぞれの側面は、それが直接的である限りに於いては、自分を揚棄し他方の側面へと移行するものとして措定されており、それ自身が否定的な関係である限りに於いては、同時に自分にとって肯定的なものとしての他方の側面によって条件づけられている」と規定する。二つの「限りに於いて」によって二つの有り様を示されている。後半の「否定的な関係」の観点からは、互いに条件づけられているという意味で「モメント」としての規定を指している。前半が「没交渉的自立性」を言っているのだとしたら、「全体と部分の相関」の論理に嵌り込んでしまう。そこでヘーゲルは「没交渉的自立性」を避けて、「自分を揚棄し他方の側面へと移行するもの」という規定を記す。このとき、新たな形態の「相関」が生じている。言うまでもなく、それは「力とその発現の相関」である。

2-3 「相関」の論理的根拠の顕在化

「力とその発現の相関」と「内的なものと外的なものとの相関」は、「全体と部分の相関」に於いて隠伏していた論理の顕在化を扱っていると見ることができる。この視点から、要点を絞って、順に見ていくことにしよう。

2-3-1 動的同一性の論理——力とその発現（外化）の相関

2-3-1-1 ヘーゲルは、「力 Kraft は全体と部分の相関の真理である」（S.172）であると言う。「力」は「自立的な他者存在〔諸部分〕の関係を形づくっていた全体の統一」であったが、「この多様性にとって外的で没交渉的なものであることを止めている」（S.173）という形で成り立つ。——ヘーゲルの「力とその発現の相関」の叙述は詳細を極めているが、本稿では、「全体と部分の相関」の孕む難点に関連する限りで、論点を取り上げることにする。

ヘーゲルが先ず問題にするのは、「全体と部分の相関」の解消と直接に繋がりのある規定である。この規定は、「互いに条件づけられている」という規定を承けたもので、「自分を揚棄して他方の側面へと移行する」という規定として結実されるはずである。また、このとき、没交渉的な「直接的存在」が「力」として規定されるはずである。

ヘーゲルは「力」を「反省した存立するはたらき Bestehen と直接的な存立するはたらきとの統一、言い換えれば、形式的統一と外的自立性との統一」と規定する。重要なのは、反省した在り方と直接的な在り方の双方を存立させるはたらきが問題にされていることである。「直接的存在」はここでは放置されておらず、力によって存立させられている。「力がある」ということは、それが現れる事象に於いて、「自己内に反省して姿を隠す力の存立」と「力によって変化させられた外部の存立」とが同時に起こっていることに他ならないのである。だから、ヘーゲルは「力是一个のものに於ける二つのものである」（S.174）と言うのである。二つは交わることのない別ものであるが、まさに「力がある」ということはその同時的存立（ヘーゲルは「二つのものの接触 Berührung」と

言う)を意味するのである。「力」とは何かと言えば、それは「内部に姿を隠す運動」と「外部へと出て行く運動」の一体性である。このような事態をヘーゲルは「力は自分を自分から突き離す矛盾 *der sich von sich abstoßende Widerspruch* である」と言う。双方向の運動は不可分であって、切り離したのでは「力」は成立しない。「力は直接的な現実存在から自分を区別する限りに於いて、直接的な現実存在へと移行する」という一見奇妙な表現は、この不可分性による矛盾を言っているのである。——「全体と部分の相関」との関連で言えば、一つの「力」は「外部に諸部分を存立させること」と「外部から区別されて内部に引きこもること」とに分裂してはたらくが、そのはたらくが隠伏化して結果だけが抽象され、直接態として受け取られたとき、前者が「部分」として、後者が「全体」として存在した。

しかし、これで「力」の概念のすべてが明らみに出たわけではない。「力はまだやっと、即自的に存在する〔隠伏している *ansichseiend*〕直接的な活動態でしかない」(S.175)から、「自分にとって外的な直接態としての自分の否定へと本質的に関係づけられており、この外的な直接態を前提と条件¹⁾として持っている」(ebd.)。そのような在り方をして「力」は「反省した統一」として外部から切り離されて理解される¹⁾。

2-3-1-2 「自己内反省していく活動」としての「力」が「自分にとって他者であるものとしての外的なものに関係づけられている」という状況から始めることにしよう。「力」は、このように外的なものと同様に、同時に、外的なものが「即自的に無なるものであり自分と同一であるものとしての外的なものに関係づけられてもいる」(S.176)のであるが、差し当たりは、外的なものは隠伏的にしか「力」ではない。では、それはどのようにして「力」であることを顕在化するのだろうか。

ヘーゲルは、「力」への外的直接態の係わり方を「刺激 *Anstoß*」(ebd.)とし、「力を誘発する」(ebd.)と言う。このとき、「力」が能動的で、外的直接態は受動的である、という振り分けが危

うくなる。外的直接態も、「力」を「誘発する」のだから、或る意味で能動的なはずである。例えば、「磁石が鉄を惹き付ける磁力を發揮する¹³⁾」場合、鉄ならば、磁力を誘発すべく刺激を与えていると説明されてもいいだろう。この場合、木材が誘発しないのは、木材に誘発する力がないからである。或る対象が磁石に内在する力を誘発するかどうかは、磁力がどんなものであるかによって決まる。例えば、万有引力ならば、微力ではあるが、木材でも磁石の引き付ける力を誘発するだろう。——このように「力」の外部も「力」として規定されると、どういうことになるか。

「…誘発する力が誘発するものであるのは、専ら当の力が外在態を具えている限りに於いてのこと、したがって、当の力が誘発される限りに於いてのことではしかない。言い換えれば、力が誘発するものであるのは、当の力が‘誘発されている’ということへと誘発される限りに於いてのことではしかない。したがって、逆に言うと、初めの力が誘発するのは、初めの力自身が、自分自身、すなわち、初めの力を誘発するようにと他方の力を誘発する限りに於いてのことではしかない。」(S.178)

これでは「誘発」の無限後退が成立してしまう¹⁴⁾。このような事態をどう解したらいいだろうか。——刺激を受ける「力」は、刺激を受ける限りでは受動的でしかない。しかし、それは、刺激を受けることによって力を發揮するのであるから、能動的になるのである。この受動が能動に転換する過程をヘーゲルは「力の自分自身への還帰」(S.179)と捉える。どういうことだろうか。——「力」は、その外部の存在によって「誘発」されることで、自分を発現〔外化〕する。「発現」することによって「力」は自分を誘発した外在態を自分自身のモメントとして措定する。これによって自分が外部によって誘発されていることが否定される。外へ出ていくこととしての「発現」は、「誘発」に対する「反作用 *Reaktion*」であるから、「力」は外へ出ていくことによって、自分を「誘発」した外部を自分にとっての存在に変える。こ

うして、自分を誘発するようにと誘発した自分を見出す。「力」は「外部」をもともと自分が働きかけることによって形づくったものとして見出すことによって、自分を見出すのである。この事態を、ヘーゲルは簡潔に「外在性の内において自分自身へと関係する」と表現する。これは、「他者への反省の運動」と「自己の内への反省の運動」が同一である、という「反省の論理」に支えられているのである。

2-3-1-3 ヘーゲルはこのような「力」の動的把握の中に「無限性」の構造を見る。——「無限性」は「有限性」を真の意味での揚棄することによって顕在化する。「力」の「有限性」は、「力の前提を立てる反省と自己関係する反省が…区別されている」(S.179) ことにその本質がある。この区別によって、「力」は専ら誘発されるだけのもの、「外部の直接態」は誘発するだけのもの、として現れる。この意味で「力」は有限である¹⁵。しかし、「力の発現」に於いて本当に生じていることを顕在化させると、「力の受動性はその能動性に於いて成り立つ」ということになる。それは「力の外在性が力の内在性と同一である」(ebd.)とも表現できるが、その根底には、「力の他者への関係は力の自分自身への関係である」(ebd.)という論理、すなわち、「内」と「外」の二つの方向への運動が一つの反省運動に於いてあるということが厳然とある。これが「無限性」である。

2-3-2 「内」と「外」の同一性と区別の論理—— 内的なものとの外的なものとの相関

「力とその発現の相関」の帰結は、「無限性」の構造をもつ反省運動、すなわち、「他者へと移行する運動」が「自己の内面を形づくる運動」でもあるような一つの反省運動であった。「内的なものとの外的なものとの相関」は、反省運動が形づくっていく「無限性」の構造に「内容」の観点が組み込まれる必然性を導出する。

2-3-2-1 先ず「内的なものとの外的なものとの相関」が「内容面での同一性」と「形式面での同一性」に於いて成立していることの確認からはいろう。

ヘーゲルは直前の相関を承けて、「反省した直

接態の形式」あるいは「本質の形式」を「内的なもの」と呼び、「存在の形式」を「外的なもの」と呼んでいる。そして、「両者は対峙しているが、一つの同一性である」(S.180)と付け加えている。この「一つの同一性」をめぐって、この相関は議論が展開する。ヘーゲルによれば、この相関に不可避免的にまわりつく「同一性」は二つの観点から見られる。

一つは、「内容を孕んだ根底としての両者の堅固な統一」(ebd.) (これをヘーゲルは「絶対的事象」とも言う) である。このような「同一性」は理解しやすいだろう。或る一つの内容を孕んだ具体的事象について、その内と外が語られる場合の、その事象がこの「同一性」の担い手ということだ。——さて、そのような「同一性」を認めるとき、ヘーゲルが問題にするのは何か。「内的なものとの外的なもの」を区別する形式は、内容を孕んだ事象とは相異している、すなわち、没交渉的に分離している」ということである。「形式」が「内容」から分離することによって抽象化されているのであるが、これによってさらに、「内的なもの」と「外的なもの」も、「何についての」という土台(根底 Grundlage)が奪われることによって、分離し没交渉なものとなってしまう。(以上 S.180)

しかし、ヘーゲルは、「形式」のこのような分離的固定化を無意味だとは解さない。

2-3-2-2 形式面での「内的なもの」には「絶対的形式の規定された関係」(S.182)が内在しており、これが「形式面での本質の完成」(ebd.)を表すのである。

「内的なもの」と「外的なもの」は、内容を捨象したからといって、その結びつきもなくなるわけではない。「両側面は、それら自身に於いてではなく、他者に於いて同一の根底をもつ相異なる形式規定である」(S.180f.) という構造をもつことは変わらない。形式であれ、何らかの「一つの同一性を形づくる」(S.181) ことがなければ、およそ相関することもあり得ないからである。ヘーゲルは、このような対立する形式規定について、「両者の統一は純粋にして抽象的な媒介である」と言い、この「純粋な抽象的媒介」に於いて「両

規定は同一である」ことが成り立つという。(ebd.)
しかし、この「純粹にして抽象的な媒介」というのは、如何なる媒介であろうか。ヘーゲルは、「形式の統一は両規定の対立を含んでいる」から、ここにある「同一性」は「一方の規定が他方の規定への移行する運動に他ならない」(ebd.)と言う。しかし、これは如何にも不可解である。一方の規定が他方の規定へと移行するというのなら、そこには「同一性」は不在ではないか。また逆に、「同一性」が認められるならば、他者の存在を含意する移行が成り立たないのではないか。当然の疑念であるが、ヘーゲルは、このような「形式の固定化」は「被規定態 Bestimmtheit」を形づくるという。どうなっているのか。

「…両規定のそれぞれは他方の規定を前提し、自分の真理としての他方の規定へと移行するばかりでなく、それぞれがこのような意味で他方の規定の真理である限りで、それぞれは被規定態として措定されたままでありながらも、両者の統体を示している。」(S.182)

この文は、「同一性」が「統体」と等値されることによって¹⁶、辛うじて意味をなすように見える。引用の後半は「絶対的形式の規定された関係」、すなわち、相異なりながら、その相異に於いて統一が成立している、という構造を示している。しかし、やはり、不可解さは残る。ヘーゲルは「内的と規定された或るものは、まさにそのゆえに外的とも規定される。その逆でもある」(S.181)という事態を回避しない。内的なものとのあいだには、「無媒介の反転」しかない。これを好意的に解すれば、「内的」と「外的」という区別はあるが、形式を見ただけでは、何か或るものにどちらの規定を帰属させるかは決められない、ということだろう。しかし、そうだとすれば、この不可解さは、内容を捨象したことになったことになる。ヘーゲル自身、この形式面での同一性には「両側面をともに含んでいるような同一の根底が欠けている」と指摘している。両規定を結びつける「媒介」の実質を提供するものがないので

ある。

2-3-2-3 では、「内容」が両規定の「同一性」を支えるというだけでいいのか。しかし、ヘーゲルは、「内容としての同一性」と「形式としての同一性」が「一つの統体の二側面」(S.184)でしかないと言い、新たな視界を拓く。——「内容としての統体」は、形式規定を根底に於いて支える土台である。それをヘーゲルは「形式の前提を立てる反省によって初めて自己内反省した直接態である」(S.184)と捉え直す。つまり、両規定の形式が区別を立てるはたらきをする裏側で、外部としての区別なき同一的なもの、すなわち、「内容」を前提として立てているということである。これは、「措定していく運動」が「前提を立てていく運動」と一体である、という「反省の論理」の顕在化である。このようにして「内容」と「形式」が一つの反省運動に於いて同時に形づくられていくことが露見する。

形式に於ける「内的なもの」と「外的なもの」という区別された両規定が成立すること、同一の内容が根底にあること、この両者は一つの事柄の全体に他ならない。前者が欠けたのでは、無定型な何かが目の前にあるだけになり、後者が欠けたのでは空虚な規定がバラバラに頭に浮かぶだけである¹⁷。「統体は、形式あるいは被規定態〔内的なものと外的なもの〕を介して自分自身と媒介しているものであり、被規定態は単純な同一性〔根底をなす内容〕を介して自分自身と媒介しているのである。」(ebd.)と纏めることができる。

3. 全体論の哲学的意味

3-1 「本質的相関」の展開に於ける「全体」の論理的意味

「本質的相関」で展開されたことは、「現象」との関連で言えば、諸部分の集まりでしかない「現象世界」と一つの全体を世界の本質と見なす「それ自体で存在する世界」という形で、世界を二側面から見るような「概念枠」の真相を露呈することになった。この観点から本稿の分析を振り返ることにしよう。

「全体と部分の相関」は、「全体論」も「部分論」

も論理的に破綻することを示した。それは、全体と部分という二側面(関係項)が、相互依存的モメントでありながら、自立的に現実存在するものでもある、という対立する在り方を「矛盾」と見なすばかりで、これを克服することができない、構造を反復するばかりだからである。

「力とその発現の相関」は、上の「矛盾する構造」を克服するために、先の相関では「全体」の位置にあった「否定的統一」の側面を、「自分を揚棄し、他者になる運動」として捉え直すことによって、相関の二側面を媒介する論理を顕在化させた。「力」という概念が側面の一つとなったのは、この論理によって「力」の概念が構造化されているからである。「全体」の自立化は「自分を揚棄し、他者になる運動」を隠伏化しているのである。この運動はさらに分析され、「力」と「その発現」の関係は同一性のモメントを得ることになった。

「内的なものとの外的なものとの相関」は、「力とその発現の相関」に於いて明るみに出た「二側面を媒介する論理」を、「反省の論理」を露見させることによって、「形式」と「内容」の問題として捉え直した。これによって、「本質的相関」の区別と同一性の不可分結合の構造が顕在化したのである。すなわち、形式の上での同一性と区別の不可分性が内容の上での同一性を土台としていること、そして、そこに形式と内容の統体である一つの全体が常に形成されていること、がその構造である。

以上の帰結を、もう少し大きな文脈に置くことにしよう。

3-2 全体論の動的解釈

以上の論理構造は、我々の認識の過程と見る方が無理がない¹⁸、と私は思う。

「全体」が「諸部分」を支配する「力」として、「諸部分」が「全体」によって支配されるモメントとして捉えられるとき、「全体論」が成立し、その逆に、「諸部分」がそれぞれ自立的に存在してこれらが結合の「力」をもって「全体」を形づくると考えるとき、「部分論」が成立する。前者

も後者も、全体か部分かいずれか一方に「力」を帰属させ、相手方には左右され・支配される役割だけを与えている点では同じである。しかし、「力とその発現の相関」の分析から顕在化したことから見ると、このような「力」の一方的な支配は成立しない。互いに相手を支配し形成しながら、自分もその反作用を受けて変化していき、新たに両者の相関を全体として形づくっていく過程があるだけである。

「力の交互作用」の中に「内的なもの」と「外的なもの」の二形式規定を読み込むとき、我々は、「内的に隠れて見えないもの」と「外的に露わになっているもの」とを結びつける「一つの内容」が隠伏していたことに気づく。つまり、「力の交互作用」の中に「内的」と規定される側面と「外的」と規定される側面との区別を認めることで初めて、その区別を支えている土台(根底)が既にあったものとして顕在化してくる。しかし、この規定の区別と土台との結合(統体)が初めから存在していて、それが規定の区別と土台を決めていたと考える必要はない。むしろ、形式的に区別する活動が同時に土台を、さらに形式区別と土台との統一である「統体」を、その都度形成していくと考えた方がいいだろう。ここでは、生成の過程に於いてその都度形成された「全体」という意味でのみ「全体」は認められ、その限りで「全体」の拘束性も認められる¹⁹。——このように動的に捉えられた全体論が、ヘーゲル哲学の目指す具体的な認識の基礎となるはずである。

(終わり)

注

¹ 本稿で扱うヘーゲルのテキストは、『論理学』に関しては、G.W.F.Hegel Werke in zwanzig Bänden (Suhrkamp Verlag 1969) の Band6 を用い、頁数を S. によって引用直後の () 内に記す。他の巻については、巻数も記す。

² David S. Stern は、基礎づけ主義と全体論の対立は「擬似ディレンマ」だと言い、ヘーゲルの哲学的企てを「認識論の批判は基礎づけ主義と全体論の双方を拒絶することを強いる」と解する。ヘーゲルの認識

論批判を議論の中心に置く点で同意できるところもあるが、私は或る種の「全体論」を認めなくてはヘーゲル哲学は成り立たないと思う。

Vgl. Stern, David S. *Foundationalism, holism or Hegel?*

³ Duque, Felix. *Die Erscheinung und das wesentliche Verhältnis*. In *Wissenschaft der Logik*, Hrsg. Von Anton Friedrich Koch und Friederike Schick. Akademie Verlag 2002, S.154f.

⁴ Michael Dummett の議論について次の本を参考にした。Jerry Fodor and Ernest Lepore, *Holism A Shopper's Guide*. Basil Blackwell Ltd 1992 (邦訳 『意味の全体論』 柴田正良 訳 1997年)

⁵ 原語は *seiner* となっているから、この場合主語の「側面」か、関係節の主語である「統体」を受けるのは文法的に誤りであるが、内容から判断してこのように取った。因みに、寺沢恒信の日本語訳も同様である。Miller の英語訳では、*itself* となっており、おそらく、関係節内の主語と取っていると思われる。

⁶ Bd.5, S.113f.

⁷ Schmidt は、同一性と統体を等値することによってヘーゲルの議論が無用の混乱を起こしていると指摘している。Schmidt, Klaus J. *G.W.F.Hegel: Wissenschaft der Logik-Die Lehre vom Wesen*. Schöningh, 1997. S.175

⁸ Wölffle は「本質的相関」の構成に関して、「力とその発現の相関」だけで後は不要だとしているが、「現象の克服」という論点だけで見ても、無理があるし、そもそも「相関の概念」が不明になることが問題である。Wölffle, Gerhard Martin: *Die Wesenslogik in Hegels Wissenschaft der Logik*. Frommann-Holzboog 1994, S.172,179

⁹ この表現は Schmidt による。Schmidt, Klaus J., a.a.O., S.162.

¹⁰ Vgl. *Hegels Logik* Justis Hartnack, Frankfurt am Main 1995, S.68

¹¹ ここでヘーゲルが「前提」という語を使っているのは適切でない。「前提」としたのでは、単に外部に無媒介に存在する物と区別がなくなるからである。Schmidt は「単に力の前提としてではなく条件としてもヘーゲルは捉えている」としている。Schmidt, Klaus J., a.a.O., S.168

¹² ヘーゲルはここで直ちに、この「力の前提・条件と

しての直接態」を、「自己関係する否定的統一として規定されたのだから、物ではない」(S.175)として、二つの力の関係へと議論を進め、「誘発の論理」への準備としているが、これには無理があると思われる。Schmidt も「本質論理のこの段階ではもはや物は、そこに於いて力が自らを否定し前提を立てるような直接的現実存在に他ならない」として、説明抜きにこの現実存在を「力」としている。(Schmidt, Klaus J., a.a.O., S.168) 私は、外的存在がどのように規定されなくてはならないかは、「誘発」の必要性から導かれるのであって、「外的存在が力であるから誘発する」というのでは説明が転倒していると思う。この線に乗って「力の誘発」の箇所は解釈されるため、「二つの力の相関」からの論述は、事実上、黙殺する結果になっているが、ヘーゲルの議論はこれによって神秘化を免れるはずである。

¹³ Justis Hartnack, a.a.O., S.70

¹⁴ このような事情を見て Hartmann は、ヘーゲルの「力」の概念は、近代物理学的なものというより、カントの *Anfangsgrund* の問題だと見ている。Vgl. Hartmann, Klaus: *HEGELS LOGIK*. De Gruyter 1999. S.244. しかし、1831年の講義でヘーゲルは、ニュートンに言及している。Vorlesungen über Logik, Berlin 1817 Nachgeschrieben von Karl Hegel, Hrsg.von UDO RAMEIL unter Mitarbeit von HANS-CHRISTIAN LUCAS, G.W.F.Hegel Vorlesungen Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte Band 10, Felix Meiner Verlag Hamburg 2001, S.155

¹⁵ 1831年の講義でヘーゲルは「力とその発現の対立は、単なる悟性の虚構である」と語っている。もちろん、理性がこの固定的対立を解消するのである。a.a.O., S.155

¹⁶ Schmidt は、注3で指摘したように、この等値によってヘーゲルの説明が無用の混乱を引き起こしていると言っているが、おそらく、内容を捨象したとき、対立する形式の同一性は「一つにまとまった全体」というようにしか成立しない、という考えがヘーゲルにはあったように思われる。Schmidt, Klaus J., a.a.O., S.175

¹⁷ 1831年の講義では「…同一の内容は、全体と部分の場合と同じように、区別された両規定に於いてしか

存在しない」と言われている。a.a.O., S.155

¹⁸ 「真なるものは全体である。しかし、全体とは、ただ自己展開を通じて自分を完成する實在のことに他ならない」(Bd.3, S.21) という『精神現象学』序論の有名な箇所は、存在論的にも認識論的にも読むことができるが、この著作の内容から見て、後者と採る方が自然だと思われる。

¹⁹ Bandom がヘーゲルの全体論を「弱い全体論」と規定するとき、認識の過程として、私のものと近い「全体論」を提示している。 *Holism and Idealism in Hegel's Phenomenology*, in *Hegel Studien* 36, 2001

要旨

本稿のねらいは、ヘーゲル論理学の「本質的相関」を分析することによって、あり得べき「全体論」の論理的構造を明るみに出すことにある。

1. 全体論一般の孕む難点の一つを提示する。
2. 「本質的相関」の概念を分析し、さらに「全体と部分の相関」、「力とその発現の相関」、「内的なものとの相関」を追跡していく。
3. あり得べき「全体論」の構造を提示し、その哲学的意義を考察する。

(2009.10.5.受稿)